

ハスモンヨトウ

1 形態と生態

- (1)埼玉県では、作物を加害するヨウムシ類は4種類ほどで、なかでも春期のヨウムシや夏秋期のハスモンヨトウによる被害が問題となっています。
- (2)ハスモンヨトウの雌成虫は葉の裏に、200～1000粒の卵を塊(直径2cmほど)に盛り上げて産み付け、黄褐色の毛で覆います。孵化した幼虫は2～3齢期(1.5cmくらい:黄緑～黄灰色)までそのまま集団ですごします。幼虫の胸部には1対の黒い斑点があるのが特徴です。成長とともに移動分散して、最終的には6齢幼虫(約4cm:灰～黒褐色)になり、その後土中で蛹になります。
- (3)南方系の害虫なので、関東地方では野外での越冬は困難ですが、ハウス内などで越冬したり、遠方から飛来した成虫が春先から活動を始めます。埼玉県では年4～5回発生し、8月下旬頃から増え始め、10月に最も多く発生します。

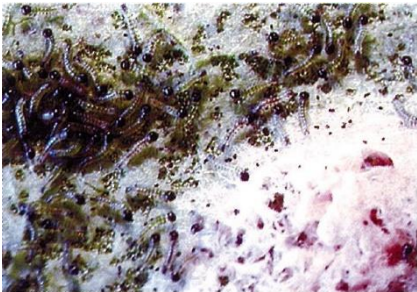


写真1 孵化直後の幼虫



写真2 老齢幼虫 (体長4cm)



写真3 成虫 (体長2cm)
斜めの白帯模様が特徴

2 被害の様子

- (1)若齢幼虫は、葉の表皮を残して白色のカスリ状に食害します。食い尽くすと隣の葉へ移動しますが、頭数の割には食べる量が少ないので発生を見逃すこともあります。
- (2)しかし、成長とともに食べる量が急激に増え、網目のような穴をあけながら暴食し、葉脈や葉柄部分のみを残して丸坊主にしてしまうことも少なくありません。
- (3)また、新芽や果実に食い込んだりして、作物の生育を抑制したり、品質・収量を低下させたりします



写真4 老齢幼虫による食害

3 発生について

- (1)非常に雑食性で、27科77種の植物を加害するといわれています。露地ではサトイモ、ダイズ、サツマイモ、ヤマトイモ、キャベツ、ハクサイ、ブロッコリー、レタス、ナス等での発生が目立ちます。また、秋が深まり、気温が下がってくると施設へ侵入し、イチゴ、トマト、葉菜類、花き類等も加害します。
- (2)空梅雨の年や、梅雨明けの後、高温・乾燥が続く年に大発生する傾向があります。
- (3)性フェロモントラップで雄成虫を捕獲して、発生状況を把握することができます。発生消長は年や場所によって大きく異なります。地域ごとにトラップを設置して、過去のデータと比較すると、その年の発生時期や発生量を予測することができます。

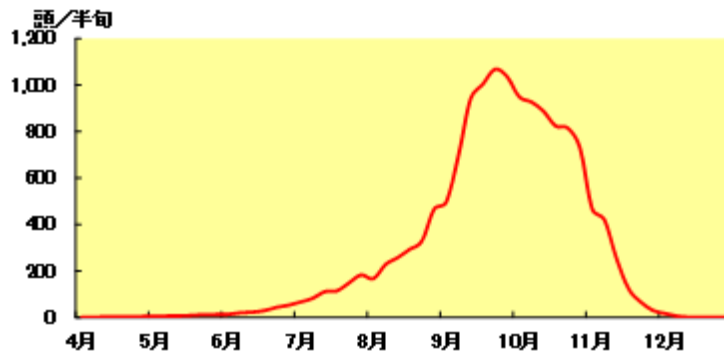


図1 フェロモントラップ誘殺状況
(深谷市 サトイモほ場付近: 2005~14 平均値)

4 防除時期と防除方法

- (1)サトイモやダイズを好んで加害するので、8月中旬頃から葉の裏に卵塊や幼虫集団、食害痕がないか調べてみると、その後の周辺作物での発生や防除対策の目安になります。
- (2)5~6 齢幼虫は、昼間は土中に潜み、夜間に活動するので発見や防除が困難となります。できるだけ若齢幼虫のうちに防除します。

ア 耕種的防除技術

- ・卵塊や若齢幼虫の集団の見られる葉は、見つけ次第摘除します。一度に数百匹を防除することになるので効果の高い防除方法です。
- ・施設では開口部にネットを張るなどして、成虫の侵入防止をはかると効果的ですが、ネットに産み付けられた卵塊から若齢幼虫が入り込む場合があるので、注意が必要です。

イ 薬剤防除対策

- ・老齢幼虫には薬剤の防除効果が劣るので、若齢期をねらって薬剤散布を行います。
- ・幼虫は葉裏に多いので、薬液が葉裏にも十分かかるようにします。
- ・ハスモンヨトウは薬剤に抵抗力が付きやすく、ある薬剤に強くなってしまうと、同じ系統の薬剤の効果はあまり期待できません。異なる系統の薬剤を散布します。
- ・合成ピレスロイド剤など、天敵類に影響の大きい薬剤の使用はなるべく避けます。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0311

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県